

シンポジウム

11 シートーク(前半)

< パネリスト >

餌取順子 (北海道労働者協同組合ケアワーカーズコープいちい 代表)

我妻貞寿 (北海道高齢協道南地域センター 代表)

池田晴男 (労働者協同組合道南ネット 専務理事)

吉村八重子 (北海道ワーカーズコレクティブ連絡協議会 事務局長)

< コーディネーター >

田淵直子 (北星学園大学経済学部 助教授)

餌取順子 (北海道労働者協同組合ケアワーカーズコープいちい 代表)



「ケアワーカーズコープいちい」の餌取順子です。よろしくお願いします。

いちいは、1997年(平成9年)10月7日に設立し、5年6カ月が立ちました。私たちは、高齢協のヘルパー講座を修了した数名でいちいを立ち上げました。

子育てと家事中心の主婦がヘルパー講座に

出会い、介護の仕事を通して多くの人と出会うことで、必要とされたり、喜ばれていることを実感し、なんとかこの仕事を続けていきたいという気持ちでいっぱいでした。しかし、最初は介護の仕事も少なく、仕事が増えるようにと手作りのチラシを配ったり、訪問看護ステーションや在宅支援センターにお願ひに行ったりしました。仕事のない時は、草刈りや病院のカルテの整理をさせてもらったり、ビルの清掃をしたり、お寺のお掃除をしたりと、とにかく何でもして収入を得る努力をしました。

少しずつ仕事が増えるきっかけとなったのは、24時間介護の仕事の依頼でした。いちいのメンバーだけでは担うことができず、この仕事を断ろうかと悩んでいたとき 北海道労働者協同組合の給食現場や清掃現場の人たちが力を貸してくれてこの24時間ケアをやり遂げることができました。また、お掃除に行ったことのあるお寺から初めてのターミナルケアの依頼を受け、この仕事は「死」という形で終えました。

私たちいちいがこのように仕事を続けてこ

れたのは、いつも支えになってくれた労働者協同組合があったからこそと実感していましたから、みんなの話し合いの結果、1999年11月14日のいちい総会で最終確認をし、北海道労働者協同組合と組織統合して名実ともにワーカーズコープとして介護保険事業へと進んでいきました。

2000年の介護保険開始とともに旭川市内3地区でヘルパーステーションとデイサービスをそれぞれ開所しました。また、介護を続けていく中で、長期の入院生活から在宅へと戻る難しさがあったり、大型施設のショート利用者の人達が在宅へ戻った時に、自力で食事を取れなくなっていたり、排せつができなくなったりするケースを見てきて、自立を支援するためのショートステイが欲しいと思い2002年7月に定員3名という小規模なショートを立ち上げました。私たちはこのように、小規模・多機能で地域に密着した施設づくりをめざしてきましたが、旭川の他、全道では6都市に13の事業所・施設を展開しています。また、この展開の中で昨年12月函館に「ケアワーカーズコープ茜」が立ちあがり、今年6月には札幌に「ケアワーカーズコープあかり」が立ちあがるようとしています。

いま、私たちヘルパーには介護の質の向上が求められています。介護の仕事は、ヘルパーが一人の人間として利用者さんの人生と向き合い、ともに生きる共感を大切にする仕事です。誰かの指示やマニュアルにたよってできる仕事ではなく、ヘルパーそれぞれが自立し、支え合い、協同労働という形の中で責任を持ち仕事をするからこそ、ケアの質の向上へとつながると思っています。

私たちの仕事は、ひとの死といつも向き合っています。私も初めて入った方の死を受け止めるのには、時間がかかったことを覚えて

ています。

メンバーの中には、在宅の訪問をした時に椅子の上で眠るように亡くなられていた人、また先日ショートステイ利用中に心筋梗塞でなくなれるということがありましたが、そんな時でも冷静に判断し対処できるよう心がけなければならないと思いますし、家族の方々も含め私たちヘルパーと出会えた事を喜んでもらえることが出来たり、そしてなにより、一人の人の人生の完成期に出会えたことに感謝できるヘルパーでありたいと思います。

介護保険制度になってからの3年は、仕事も担い手も増え、事業としては大きな前進をしてきましたが、一方では、5年前の思いや理念がうすれてきているように思われることがしばしばあります。先日、全国で介護に関わる人達の集まりがあり「ケアの質と協同労働」というテーマの分科会の中で4つのことを確認しました。

夢を語り、共感する仲間を広げる

仲間への配慮を怠らない

全員が経営を担う一員としての責任をどうもつかを追求する

「良い仕事」の質を作っていくにはひとり一人が真摯に学ぶこと

協同労働とは自立した人どうしが協力をしなければ成り立たないもので、私たちはこの仕事に協同労働がもっともふさわしいと思っています。

これからは、コミュニティケアを目指し、地域で求められていること、ニーズはなにかを自分たちの足で実感し、築き上げていこうと思っています。

最後に、いま、日本には私たちワーカーズコープを法人として認めてくれる法律がありません。私たちケアワーカーズコープも全国

の仲間とともに「ワーカーズコープ法」制定の運動に参加して、1日も早い法制化を実現したいと願っています。

我妻貞寿（北海道高齢協道南地域センター 茜 代表）



まず高齢協とは何かについてお話ししたいと思います。正確に「高齢者協同組合です」とお話ししても組合と名前がつくと「労働組合ですか？」と言われて、「いや福祉関係を中心とした高齢者の活動なんです」ということを申し上げるのにかなり時間を必要とする。これは北海道だけでなく日本全国でまだ高齢協に対する認識がやはり足りないのかな、という感じがしています。

高齢者協同組合とはどのような活動をしているのか、ということを中心に申し上げます。三つの柱があります。「寝たきりにならない、させない、元気な高齢者はもっと元気になろう」ということです。これをもっと凝縮して説明をすると、「高齢者福祉」つまり高齢者のための福祉ではなく「高齢者自身の福祉」ということに要約されるのではないかと

と思います。観点を考えてみれば「高齢者だからこそ生きがいを持っていこう」ということになると思います。

高齢者というのはどういう形でまちづくりに参加していけるのだろうか？少なくとも65歳以上の高齢者がどんどん増えている現実で、しかも75歳以上の後期高齢者や障害を持った高齢者が増えている中で、元気な高齢者はどういう形でこの社会の中を高齢者としての生きがいを持ちながら生きていったらいいのだろうか？あまり理屈めいたお話はやめて、函館の「茜」のやっていることが、高齢者がまちづくりの一端を担っていることになるのかな、ということをご紹介してみたいと思います。

まず、いわゆる高齢者が生きがいを持つこと、高齢者が自立すること、このことがまちづくりの一端をお手伝いしているのではないだろうか、という感じがします。

対外的には町内会を中心にして、例えば女性部、老人クラブ、民生委員の会、といったところに出向きまして、「介護保険ってご存知ですか？」とお話をしています。多くの場合、言葉では分かっていると言いながら中身は何も知らない。そこで、介護保険とはこういうもので、こういうことに対して高齢者のためにいろいろ便宜を図ってくれる保険なんですよ、ということをよく説明してみると、初めて「分かった」ということで、その話が終わって出てくる時には畳の上に座っていた人たちが何人も廊下まで送ってくれたりして、「ああよかったな」という印象を強く持っています。

それから、茜の対内的なことではいいまして、特に高齢者の場合、生きがいを持つというときに一番大事なものは趣味だろう。その趣味をどういうふうな形で生かしていったら

いいんだろうか？そういうことをまず中心に考えまして、茜では「教養講座」をつくりました。その教養講座を通じて生きがいを持っていこうとしています。それから、「ミニミニデイ」と称しまして、通ってくる会で火曜日にやるものですから「かよう会」ということで、迎えにも行きませんしお送りもしませんが、三々五々やって来ます。500円だけいただいてうちのヘルパーさんたちが食事をつくるんです。それを食べていただいて後は一切「これしなさい、あれしなさい」と言わないで放ってあるんです。ところが素晴らしいものですね、高齢者の方たちというのは、必ず何かをやるんです。例えば、80歳を超えた方で手編みがセミプロ級の方がおられて、この人を中心にして手編みをやる。手編みが得意でない人たちはどうするかというと、日本舞踊の名取さんがいて、この人を中心にして和服に着替えて、6、7人の方がチントンシャンと始まる。昼になると先ほどの500円の食事が始まる。女性というのはいくつになっても姦しいものだな、と思いますが実際にぎやかで、私たち男が入っていくととても入りきれないような雰囲気なんです。そこで話される中身が素晴らしいものだと思います。かよう会のことをもう少し付け加えさせていただくと、自分たちがつくった作品を年に2回から3回、全市に向けて茜で展示会をやるんです。1週間に例えば450から500名くらいの方がいらしゃいまして、展示即売をするんです。その売り上げの何%かは、茜の高齢者の活動資金に使うためにいただきます。それから、日本舞踊の方は今年初めて湯の川温泉で発表会をやることになりました。これは素晴らしいな、やはり高齢者というのは捨てたものではないな、と思っています。生きがいとはどんなことだろう、というと、

ちっとも難しいことではないと思うんです。これっぽっちの小さなことでも、その人が感激したものがあればそれが生きがいなんです。例を申しますと、96歳で2月21日に他界された方がおりました。白内障だったのですが手術して右目が0.2と左眼が0.7になりました。それまで新聞もテレビも見れなかったものが、インテリの方だったのですから朝日新聞を裸眼で読めるようになって、非常に人生が明るくなった。ところが高齢で歩くことができず、耳もほとんど聞こえない。その方が私に向かって「俺、歩けるようになりたいんだよね」と言いました。「どうしてですか？」と聞くと、「俺、茜の仕事を手伝いたい」と言うのです。これはまさに高齢者の生きがいだと思うんですよ。こういう小さなことが、非常に大事なことなんです。だから元気な高齢者も含めて、ヘルパーさんたちも、いかに心のケアが大事か、ということを訴えたいんです。

そういうことも含めていろいろ考えてみますと、組織や地域の中に参画していくことも大事ですけれども、やはり高齢者自身がいかに自分たちで自立した生活をしていくかということが大切です。その自立した生活の中には趣味を生かしていくという生きがいもあるでしょうけれども、できれば元気な高齢者が集まって何かひとつ事業おこしをしたい、ということが茜の唯一の念願であります。その中でできることならば少しでも社会に貢献していこうと。これからの高齢者は自治体や地域に甘えている時代ではなくなった。自分たちでしっかりしていこう、ということを上げているところです。ありがとうございます。

池田晴男（労働者協同組合道南ネット 専務理事）



僕はいろいろな活動をしているんですが、もともとは国鉄が分割・民営化になった時に国労の組合員ということで不採用になったメンバーの一員でありまして、ちょうどILOには結社の自由委員会に87号条約と98号条約違反ということで提訴をしているんですが、これが早いものでまる16年です。今だに解決を見ないんですが、そのJRに不採用になったメンバーは函館・道南には20名いるんですけれども、この20名も含め全国で1,047名の労働者が、働く権利を奪われたこの状況を何とか撤回をさせたいということで13年前、1990年4月に「闘争団」という組織をつくって闘い始めたわけです。

これまで争議はいろいろあって「自分たちは不当に解雇されて闘っています、ぜひご支援をお願いします」という闘い方が一般的なんですけれども、僕ら道南で考えた時に、そうは言っても争議というのは一杯あるし、これだけ大きな全国的な争議であると、もう少し地域にとっての有用な頑張り方というか、

もう少し積極的な意味をなす頑張り方ができないだろうか、と考えたわけです。

その時にどういう組み立て方をしたかというところ、ちょうど13年前というのは地球規模で進む環境破壊というのが非常に世界的に叫ばれていた時代でした。大量生産・大量消費そして大量廃棄という文明・生活のあり方を全地球的に見直していこう、という時代であったと思います。そういう意味で環境問題に具体的に关わるような事業を闘争団の事業としてできないだろうか、と僕らは考えたわけです。

それからもう一点。同じように時代を見たときに、特に日本に引き寄せて考えて見れば、日本は超のつく高齢化社会に突入する段階でした。それで、地域で暮らす高齢者の人たちのさまざまなニーズに応えるような事業を立ち上げて、それで頑張ることができないだろうかと考えたわけです。

いろいろ考えましたけれども、国労の函館闘争団がつくった事業体というのは、決して金儲けをするために事業を起こすのではない。不当な差別をされた、働く権利を奪われた、そういう状況を何とか回復したいんだと。そういうメンバー、労働者が地域を拠点に頑張るやり方というのは、株式会社や有限会社という法人形態ではふさわしくないのではないかと。自分たちの働く場所を自分たち自身でつくり上げていきたいんだ、という発想で立ち上げていく事業体は何か、ということで全国的な調査をしたりしたのですが、その時にここでいう協同労働というものと出会ったということなんです。特にその中で日本全国で取り組まれていた労働者協同組合の考え方、理念というものを非常に参考にさせていただきまして、労働者協同組合道南ネットという事業体を立ち上げたわけです。

この道南ネットの理念というのは、働く意志と意欲があるにもかかわらず不当に企業から排除された労働者が、地域にとって有用な事業を立ち上げて、そこで自分たちの働く場所をつくり出していき、それを大きな柱にしているわけです。したがって、その自分たちがやる事業というのも、地域や社会にとって有用・有益な意義のある事業を立ち上げていきたい、と考えました。そこで先ほど言った環境問題に貢献する事業、それからもう一つは高齢化社会に貢献できるような事業、つまり「環境と福祉」で地域から具体的に貢献する事業という柱を立てました。

環境問題もいろいろ調べたんですが、「大量生産・大量消費・大量廃棄」の流れを変えるために、あまり大きなことを言っても仕方ありませんので、自分たちの生活から見直していこうということで、家庭から出る生ごみを優良な堆肥に変える、生ごみのリサイクルを一つの事業にできないだろうか、ということで、これらの「ぼかし肥」を自分たちで製造する取り組みを始めました。この取り組みは、今は市内で700世帯の人たちとつながっているんですが、このことによって何が生まれたかということ、やはり自分たちの生活には無駄が多い、この無駄を解消するために生ごみであれば堆肥にして土に返す、そうすれば無駄な化学肥料を使わないで済む、あるいは農薬を使わないで済む、そういう堆肥を積極的に使ってくれる有機栽培農家の人たちとのつながりもできる、という形で我々の関係が一步一步広がっていったわけです。

もう一つ重要なことは、僕らはJRと清算事業団から2回解雇されて、働く者の人権というものに対しては非常に敏感なんです、地域をちょっと見てみると自分たち以外にも不当に人権を侵害されている人たちがたくさ

んいる。障害を持った人たちであり、不当な暴力を受けている女性、あるいは「濡れ落ち葉」などと言われて一番大事な高齢期を疎外されて暮らしている人たち、そういう人たちの人権というものに地域の中で出会っていくことになるわけです。我々は、自分たちの働くものとしての権利だけを振りかざしていても、決してそれは自分たちの問題の解決にはつながっていかない、と考えて、自分たちの人権の問題以上に他者の人権に敏感になっていこうと考えたわけです。

それで、地域のいろいろな障害者の人たちとつながる中で、闘争団として初めて障害者の共同作業所を立ち上げました。この作業所の中で何をやるかということ、これもまた障害者も環境問題に敏感になろう、ということで、学校給食で捨てられていた廃食油を集めてきて、リサイクル石鹸をつくることをメインの事業にしました。ここで障害者の福祉と環境問題というものを具体的な形で結びつけることができました。

こういう取り組みの経過の中に、地域のさまざまな市民活動・市民団体の人たちに関わっていただきました。その中で、自分たち以外にもまちづくりや地域の環境、人権といった問題に一生懸命関わっている人たちが一杯いるということがわかったんですね。そういう人たちが個別に自己完結する形で頑張るのではなくて、地域の中でネットワークを結んで頑張っていったらどうか、と。もっと大きな力を発揮することができるのではないかと考えまして2年前にNPO推進道南会議というものを函館につくりました。

この道南会議の中には、まちづくりのグループやさまざまなNPO団体が入ってきています。ここで労働者協同組合、あるいはワーカーズコレクティブ、さらには生協、そして

まちづくりなどに関わっているNPO、あるいは高齢者福祉に関わっているさまざまな福祉団体とのつながりがネットワークという形で結ばれました。

「小泉改革」などさまざまに言われていますが、やはり地域の中で目覚めた人たちがさまざまなネットワークをつくりながら、自分たちの足元から少しずつ日本のこの閉塞状況を少しずつ変えていく、そのことが最終的には日本全体を大きく変えていくことにつながるのではないだろうか、と考えて函館で取り組みをしています。このあと、函館からの報告ということで丸藤さんも面白い話をされるとお思いますので、その話も聞いていただいて函館全体の非営利・協同の取り組みというが市民活動をイメージしていただければ、と思います。

吉村八重子（北海道ワーカーズコレクティブ連絡協議会事務局長）



ワーカーズコレクティブは働く意志のある者が集まって、事業を起す上で必要な経費

を全員が平等に出資をして協同で経営、そして労働をも担う働き方をいいます。地域で暮らす人々が生活者の視点から地域に必要なモノやサービスを市民事業として事業化しています。ある意味で労働者の協同組合というよりも市民事業者の協同組合といった方がふさわしいかも知れません。ワーカーズコレクティブは欧米では古くから労働形態として法的に制度化されてきまして発展しているのですが、日本の中では「雇う・雇われる」というタテ関係の労働形態しかなく、ワーカーズコレクティブのようなヨコ組織の労働形態が誕生したのが1982年、神奈川が発祥の地とされています。生活クラブ生協の事務作業の一部を組合員が担うという形でワーカーズコレクティブは誕生したのですが、その後、地域の仕出し弁当や安心できる食材を提供するワーカーズへと変わってきており、事業高もかなり伸びてきています。

このように日本のワーカーズコレクティブというのは生活協同組合、いわゆる生協を中心にして発展してきていまして、北は北海道から南は九州まで約5,700団体、17,000人の会員の人たちがいます。その多くは女性です。総事業高は2001年で87億にのぼっております。これまでワーカーズコレクティブが担ってきた労働というのは、アンペイド（unpaid）とされてきた介護や子育て、食など女性が担ってきた家庭内労働が主だったんですが、それを社会化することで賃労働だけが労働ではないということを示してきたように思います。

私たち北海道ワーカーズコレクティブ連絡協議会は、1986年に札幌にある生活クラブ生協を母体として誕生しています。連絡協議会に加入しているワーカーズは現在29団体、約400人の会員がおります。事業内容として

は、パンフレットを見ていただきたいのですが、まず4つの仕出し弁当屋があり、その他に道産小麦を使ったパン屋「めむ」があります。これらが、食のワーカーズとして札幌で活動しています。今年行われるNPOの全国フォーラムでは、スタッフを始めとして参加者に対しての「食」の部分を担当しております。それぞれは小さいのですが、それぞれのワーカーズが食のパッチワークという形で、このような大きな大会の食を担当することができるということは、自分たちの勉強でもあります。そこまでワーカーズへの期待が広まってきているのかなと思います。

福祉の分野では在宅支援サービスで介護保険にも参入していますし、地域の中に助け合いの仕組みをつくりたいということで、高齢者だけではなく障害を持っている方、産前産後で助けを必要とする方のケアも担っております。事業高は福祉の部分で5,000万近くになっています。

三つ目は託児ですが、17年前にこの託児ワーカーズは誕生しています。これまで女性の社会参加支援ということで、「託児」という名称を使ってきましたが、少子高齢化や核家族化で子育てが孤立化しているという現状が活動の中から見えてきて、私たちは託児ワーカーズから「子育て支援」ワーカーズへと名称を変えてきました。今、子育て支援ワーカーズ4つあるのですが、昨年NPO法人をとりまして、これまで地域で活動してきた託児の部分から、親子が自由に集える「ひろば」事業へと活動の幅を広げました。今年からは市内1箇所ですべてのひろば事業を4箇所に広げていくことになりました。

四つ目は生活クラブ生協の業務を担当するワーカーズが5つあります。最近、共同購入する形も様変わりしまして、各家庭の戸別配達業

務が増えてきており、また組合員への消費財を組み込むデリバリーセンターでの業務も増えてきています。

五つ目としまして、私たちは企画ワーカーズと呼んでおりますが、皆さんが今日お手元でご覧になっておりますパンフレットなどを作成するワーカーズやパソコンで編集等を行うワーカーズがあります。

このように五業種の部会でそれぞれ月に1回、定例会を開きまして、研修会や情報交換をしております。北海道のワーカーズコレクティブが上げている事業高は2001年度で2.5億円(2003年度は3億円)に達しております。連絡協議会の運営は各ワーカーズからの分担金で賄われていますが、会員研修では働くことを通して疑問を感じてきたジェンダーの問題や社会保障などについて学んでいます。ワーカーズ運動として、働く者の立場から、また利用者の立場からの社会的な問題提起も行っています。

ワーカーズの働き方にあった法律というのが現実にはありません。私たちは全国に点在する5,700のワーカーズとネットワークをしてWVJ=ワーカーズコレクティブネットワークジャパンを組織し、国にワーカーズ法の制定を求めているところです。今年10月には全国会議を予定しております、その中でもワーカーズ法について発信していきたいと思っております。

ワーカーズと名乗っていなくても、同じような志で多くの女性が地域で事業をおこしていると思われれます。例えば農協の女性がお漬物やジャムなどを作って、町おこしの一環として活動しているところも多々あると思います。そういうところともネットワークしながら、ワーカーズ法のような労働保障できるものを一緒につくっていききたいと思えます。